保育現場の物理的環境の構成に関する探索的研究

多田　幸子

要　旨

本研究では，保育者は，こどもが幼稚園内の環境をどのように捉え，必要に応じてどんな環境づくりを成すと考えているのか，また，保育者自身はどのような環境づくりを行っているのかを調査した。アンケートへの回答より，保育者はこどもが，その場所に特化した遊び以外の遊びも楽しめる場所，また，特定の遊びを展開していくための玩具や材料が揃っている場所を好むと考えていた。そして，保育者は，こどもが自ら環境づくりを行う場面として，主に遊び場面をあげ，その中で，こどもは家具や遊具の配置変更，遊びに必要な物，相手，場所の選択・調整を行うと推察していた。また，保育者自身の環境づくりとしては，ある遊びに特化したコーナーの設置，栽培や運動をテーマとする設定保育の実施が挙げられていた。これらの試みは，こどもの遊びや経験を充実させるといった意図に基いており，また，こどもの意思や天候への配慮のもとで実施されていた。

研究の背景と目的

こどもは自分を取り巻く物理的環境に自ら近づき，自分と環境との間に関係をつくるための多くの方法や手続き（Bloch & Morange, 1997/2001）を有している。そして，幼児であっても，その方法や手続きを駆使して能動的に環境と関わり，物理的経験とそれをコントロールする経験を通して，認知的側面（Bloch & Morange, 1997/2001）だけでなく，社会的側面も発達させていく（北浦 , 1999）。

そのため，こどもを取り巻く物理的環境をどのように構成するかは，発達早期のこどもの養護と教育に携わる保育者にとって重要な課題となっている。例えば,石倉（2012）や山田（2011）などの研究では，保育現場の屋内外の環境特徴とこどもの行動・活動との関係を分析し，物理的側面で環境整備が保育の質の向上に関わることを示唆している。

しかし，保育現場における環境づくりの担い手は保育者だけではない。実際には，その場の物理的環境は保育者の意図ともにこどもの意図も含みこんで整えられていく。植原（2012）によれば，保育環境の構成にあたっては，こども自身が必要だと思うもの，もっとこうしたいと思う中で環境を作り上げていくことが必要であるという。環境づくりを担うことで，「子どもたちが自由に，自分たちで安心できる関係の中で，環境と交渉しながら意味ある世界を創り出し成長していくこと（汐見・村上・松永・保坂・志村 , 2012）」が可能になると期待される。

それでは，保育者は日々の保育の中で，こどもたちがどのように園内の物理的環境を捉え，また，必要に応じてどのような環境づくりをしていると考えているのか。こどもなりの環境づくりに対する保育者の見解には，こどもがなし得る環境コントロールへの理解が現れていると推察される。この理解は保育者による環境構成と無関連なものではなく，保育者自身が保育環境をつくっていく試みにも影響を与えうる。

そこで，本研究では，保育者は，こどもが園内の環境をどうとらえ，そして必要に応じてどんな環境づくりをしていると捉えているのかを調査することを試みた。調査の中では，まず，保育者に対して，こどもが好むと推察される園内の場所と，その場が選ばれると考える理由を尋ねた。そのうえで，こども自らがどのような環境づくりをすると考えるか，加えて，日々の保育の中で，保育者自身がどのような環境づくりをしているかを尋ねた。

（所　　属）
山梨県立大学　人間福祉学部　人間形成学科

方法

1．対象者

K県の私立幼稚園に勤務する保育者26名を対象とした。回答者は18名（女性17名，不明1名）であり，回収率は69%であった。

2．期間

平成24年11月から平成25年12月に対象者にアンケートを配布し回答，返却のための期間として設け，参加協力を求めた。一部の回答は，回答者の事情により，当初定めた期間後に調査者へ返却された。

3．質問内容

まず，回答者の性別，保育経験年数，現在までに担任として保育したことのある年齢児について，括弧内に具体的な回答を記述するように求めた。次に，回答者である保育者が勤務する園において，こどもに人気があると推察される場所と，その場所を回答した理由についても記述するよう求めた。

さらに，回答者である保育者が勤務する園での日常的な保育場面において，こども自身が自分たちの活動のために環境をつくっていると思われる例を記述するように求めた。そして，最後に，回答した保育者が勤務する園において，保育環境を構成する上でどのような工夫を成しているかを尋ね，保育者自身が行っている環境づくりについて記述するように求めた。このとき，記述する事例数などに制限は設けず，また，できる限り，こどもや保育者の置かれた場面や文脈，意図なども含めて記述するよう求めた。なお，いずれの回答も無記名とした。

4．手続き

本研究への協力園には，調査の目的・意義を説明の上，情報の保護などを約束して研究の許諾を得，用紙の配布を行った。保育の支障とならないよう，回答時間帯や回答場所を固定はせず，協力可能な保育者が回答しやすい時間帯・場所を選んで記入してかまわないことを伝えた。記入済みの用紙は，園内の所定の場所に出してもらい，調査者が週に一度，園を訪ねてその度に引き取った。回答者や園の事情により，調査者が園を訪ねて引き取ることができない場合は郵便を用いて回収できるようにした。

結果

アンケートに回答した保育者は18名（回収率69%）であり，性別は17名（94%）が女性であった。保育経験年数については，未記入の1名を除く17名の平均は6年4ヶ月（標準偏差5.38）であり，最短が9ヶ月，最長が20年であった。回答者における現在までの担任経験については，未記入だった1名を除き，アンケート回答時点で担任経験のない者はいなかった。

1. 保育者の推察するこどもに人気がある場所

1）人気がある場所　回答者18名のうち，屋外を指摘した者は12名（67%），屋内を指摘した者は6名（33%）であった。具体的に指摘された場所についてはTable 1に示した通りである。回答者全体として見てみると，屋外の場所としては砂場と固定遊具（それぞれ5名，28%），屋内の場所としてはままごとコーナー（4名，22%）の指摘が最多だった。

2）人気であると考える理由　保育者が上述の場所を回答した理由の記述に目を向けた。すると，Table 1より，屋外の場合，砂場に関しては砂や泥を用いた感覚遊びや構成遊び・見立て遊びができる点が，固定遊具については，遊具特有の遊びに加えて友人と一緒に楽しめる遊びが可能である点が，そして，園庭そのものについては，広範囲での移動を伴う遊びが可能である点が指摘された。

一方，屋内の場合，ままごとコーナーに関しては，あらかじめごっこ遊びに特化して設けられており玩具がそろっているなど，他の場所と差別化されている点が挙げられた。加えて，積み木コーナーについてはそこでクラス全体で遊んだ経験がきっかけになっている点，室内遊具については必要に応じてこどもが移動・組み直しが可能である点が理由として指摘された。

2．保育者の考えるこどもによる環境づくりと保育者自身による環境づくり

保育者の考えるこどもによる環境づくりと，

Table 1　*保育者がこどもに人気のあると推察する園内の場所とその理由*

屋内外の別	場所（回答者数）		回答者番号	具体的な回答
屋外	砂場(5)		S2	屋根があり，雨の日でも遊ぶことができる。水道が近い。
			S15	お山づくり，泥だんご作り，おままごとなど，自分の作りたいものややりたいことを思いっきり表現でき，友達とも楽しく遊ぶことができる。
			S18	どろんこ遊びが好きで，思い切り遊べる場所である。様々な物を作り出せる。
			S6	水・砂と触れあうことを好み，屋根があるので，雨の日でもあそべる。また，山・川を作ったり，ままごとをしたり遊びが色々と広がっていくため。
			S14	砂を扱うことが好き。溝を運び，砂に混ぜ，トンネルなどの形成や，ドロだんご作りが夢中に成れる遊び No. 1 のようです。
	固定遊具(5)	木の城(2)	S16	お城の下にかくれることができる為。また，せまい空間で砂場遊びもできる為。
			S12	隠れるスペースである事。お店屋さんごっこに良い作りであること。
		すべり台(1)	S7	すべり台だけでなく，アスレチックのようになっているので，様々な遊びができる。
		タイヤブランコ(2)	S4	友達と一緒にブランコをこぐことを楽しんでいるから。
			S3	普通のブランコとは違い，友達と向かい合ってこぐ事が出来相手の表情を見ながら遊ぶことができる為。
	園庭(2)		S1	ボール遊びや三輪車等乗れて広く遊ぶことができる為。
			S17	鬼ごっこ，サッカー，ドッジボール，三輪車など，好きな遊びをのびのびと楽しむことができるから。
屋内	ままごとコーナー(4)		S11	常に同じ場所にコーナーがあるため，机上遊びと比べて分かりやすく，人が集まりやすい。「明日，続きしようね。」という雰囲気になりやすい。
			S10	現在は美容院ごっこを展開中。高い所が好き。
			S13	2階建てのごっこ遊びコーナーが一番人気です。家族ごっこやレストランごっこ，病院ごっこなど，あそびもどんどん展開しています。
			S8	お母さんになりきり，お料理を作ったり，赤ちゃんの世話を楽しんでいます。おかずもフェルトで作っており，ふわふわの感触を楽しみつつ，料理を作っています。また，赤ちゃんのお世話をする時もお母さんがしてくれるようにし，会話しています。家庭的な雰囲気がこどもたちには魅力なのではと思います。
	積み木コーナー(1)		S9	以前は，男児に人気のコーナーだったが，クラス全体で積み木あそびをしたことがきっかけとなり，男女問わず人気のコーナーになった。
	室内すべり台(1)		S5	大小 2 つの滑り台と跳び箱，マットを自分たちの遊びに合わせて移動し，組み合わせられる為。のぼる，ジャンプする。空間を作る隠れる等，様々な遊びが見られる。

注．（　）内は各場所におけるそれぞれの年齢群に観察された遊びの内容別にまとめた事例数に対する割合。

保育者自身による環境づくりについての各記述を，本研究における調査者 1 名と保育所または施設での保育経験を有する分析協力者 2 名が合議のもとで分類・整理した。記述の分類にあたっては KJ 法に基づき，その具体的手順は北村（2007）を参照した。

まず，質問ごとに 18 名の回答を一つの意味を持つテキストに分解し，そのテキストを分析単位とした。テキストが一つずつ印刷された紙片群を作成し，各紙片にはテキストの内容を示す一文の見出しをつけ，作業台に重ならないよう全てを並べた。テキストの関連性に基づいて紙片群をグループにまとめ，カテゴリー分けを行い，同じカテゴリーとみなされた紙片を剥離可能な透明テープで留め，その上に，カテゴリーの見出しを記した紙片をテープで貼った。カテゴリー同士の関連性を考えつつ，複数のカテゴリーを内包する中規模のカテゴリーをつくり，新たにできた中規模カテゴリーのそれぞれにも見出しをつくり，テープで留めた。

テキストの意味内容に基づいてカテゴリーごとにまとめることと，各カテゴリーの見出しを作成することとを繰り返し，それ以上のカテゴリーに分類できない段階まで至ったら，カテゴ

リーごとにまとめられたテキストの紙片群を模造紙上へ配置した。カテゴリー同士の関係を考慮して配置を定め，各カテゴリーに分類されたテキストが見えるように模造紙に貼り付け，それぞれのカテゴリーを線で囲ったり，記号などを加えたりした上で，簡単な説明文等を書き込んだ。

1）保育者の考えるこどもによる環境づくり

18 名の回答者の記述を分解して得られたテキストは 125 個であった。そのカテゴリー分類の結果を模造紙にまとめたものを図として描き直したところ Figure 1 のように表すことができた。図中の直線の種類はテキストのカテゴリー化のレベルを表し，また，図中の数字はテキスト数，矢印記号はカテゴリー間の関係を示す。

Figure 1 より，カテゴリー化のレベルが最も高く，また内包するテキスト数が最も多いカテゴリーとなったのは「こどもによる環境づくり」であり，その中に 63 個のテキスト（125 個の内の 50%）が含まれた。次点は，上述の最大カテゴリーに包含される「遊びのための環境づくり（テキスト 53 個, 42%）」であり, その次は「こどもによる環境づくりの目的（テキスト 34 個, 27%）」であった。

Figure 1 に図示化された記述回答の意味内容は，次のように文章化できた。つまり，保育者が捉えるこども自身による環境づくりには，大まかに「遊び」を目的とする環境づくりと「遊び以外の活動」を目的とする環境づくりとがある。「遊び」は，「こどもが安心して過ごせる場がある・居心地の良い場があるという気づき」のもとに生起するものであり，また，個々の遊びにはその遊び特有のこどもの姿が見られ，それらの遊びの中で「こどもは他者と関わる力」を育てている。

また,「こどもの環境づくり」は, こどもの「年齢」や, その日の「気温・日照条件」, 既存の「物の配置」からの「影響」を受ける。こどもはこれらの要因の「影響」のもとで，自らの環境づくりに「没頭」し，ときに「他児と協力」する。保育者がそのようなこどもの姿に「気づく」のは，例えば「片付け」の時点であり，この気づきをきっかけに，保育者は「こどもがつくった環境」について「考察」し，「考察」をふまえて自分自身の具体的な環境づくりを行う。これに対して，こどもは，「保育者による環境づくり」を必ずしも「喜ぶ」わけではないが，自分自身でつくった環境に対しては,「徐々に崩れて」いっても,「壊れた部分を使って別の物」を作るなどしている。

2）保育者自身による環境づくり　18 名の回答者の記述を分解して得られたテキストは 129 個であった。上述と同様に，そのカテゴリー分類の結果を図として描き直したところ Figure 2 のように表された。Figure 2 から，カテゴリー化のレベルと内包するテキスト数の点から見たところ，最大カテゴリーは「保育者による環境づくり」であり（テキスト 42 個，33%），続いて「保育者による環境づくりの目的（テキスト 32 個，25%）」,「現状のこどもの姿（テキスト 23 個, 18%）」,「実施への配慮（テキスト 29 個, 22%）」となった。

さらに，Figure 2 について，図示化された記述回答の意味内容を文章化すると，次のようにまとめることができた。つまり，「保育者による環境づくり」として，遊びに必要な「材料を準備」したり，特定の遊びに特化した「コーナー」を設置したり，栽培や運動をテーマとする「設定保育」を実施したりといったことが試みられている。これらの環境づくりは, 保育者側の「こどもによる遊びを促進したい」・「季節感」を味わってほしいなどといった意図と，こども側の「現状の遊びを継続したいという意思や欲求」に基づいている。また，保育者側の「意図」には，その時・その場で示されるこどもの「意思や欲求」と，保育者の中の「環境づくりを実施する際の配慮の視点」から影響を受ける。

こどもは，上述のような「保育者による環境づくり」からの「影響」を受けて，他児と「交流」をしたり，仲間内で特定の対象を「流行」させたりする。そして, このような「こどもの姿」を，保育者は「現状」として捉え，環境づくりを行う際の「意図」に反映させている。

考察

本研究では，保育者を対象に，こどもが園内の物理的環境をどのようにとらえ，また，こどもも自身がどういった環境づくりをすると考えているのか，そして，保育者自身はどのような環境づくりを行っているのかを探索的に調べた。

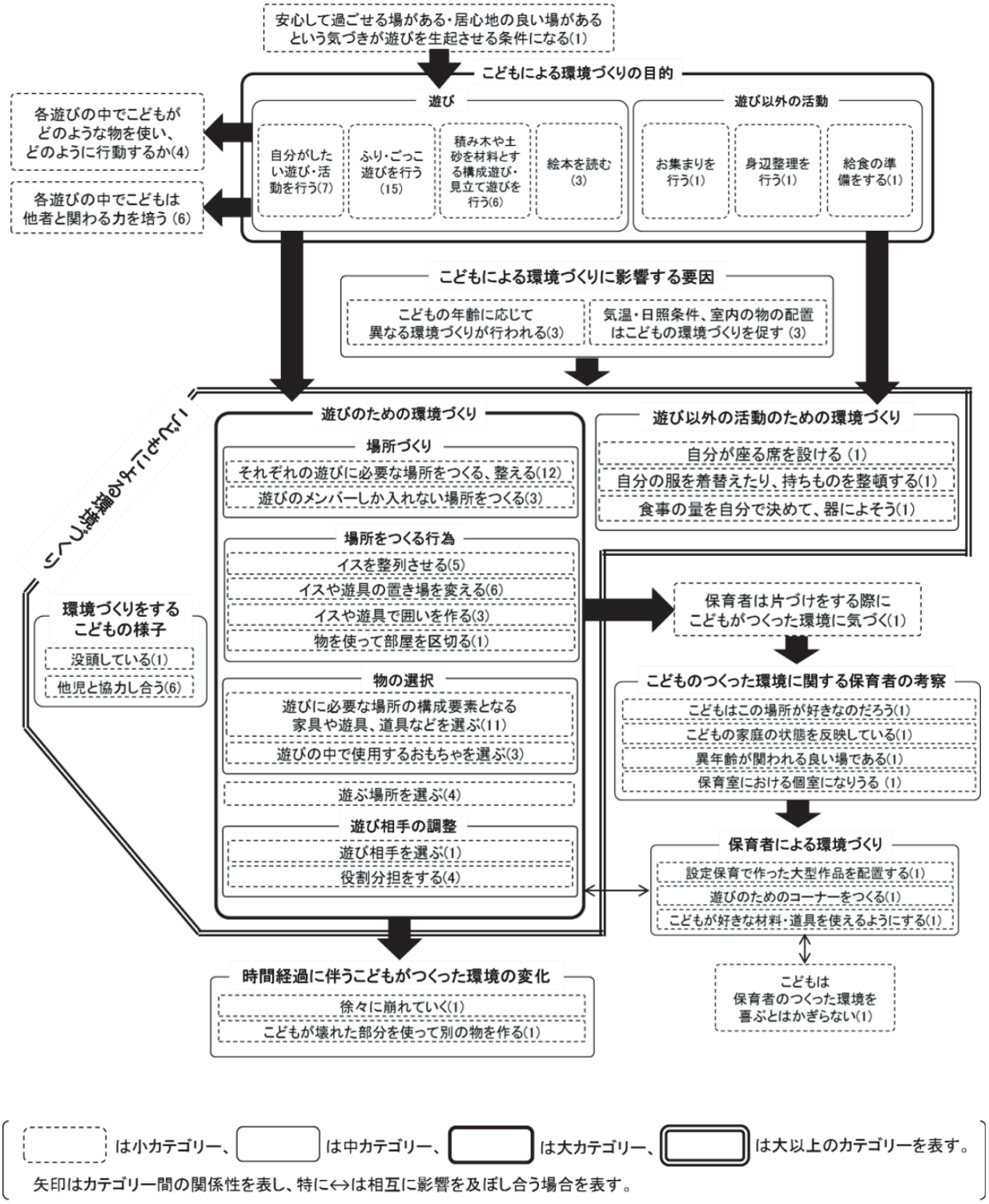

Figure 1　*保育者の考えるこどもによる環境づくりについての記述の分析結果*

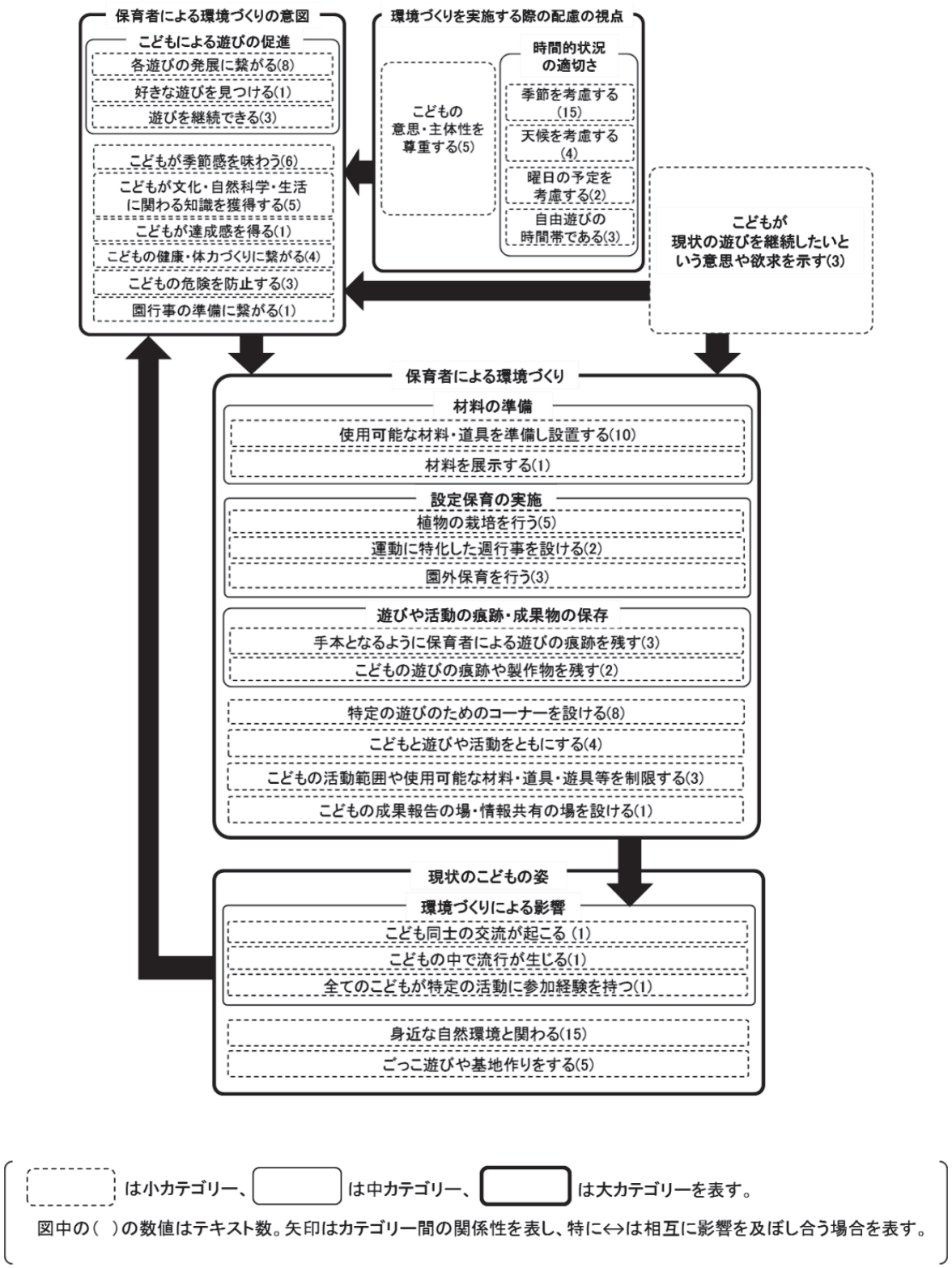

Figure 2　*保育者自身による環境づくりについての記述をKJ法の分析結果*

1．保育者の推察するこどもに人気がある場所

こどもに人気がある場所としてしばしば指摘されたのは屋外では砂場，固定遊具，屋内ではままごとコーナーであった。各場所は滞留行動（仙田, 1995）を生じさせる空間的な構造を持った遊び場所といえる。また，各場所が人気である理由についての保育者の見解を見ると，砂場・固定遊具の場合, 遊びが一義的に規定（金子・堺・七木田，2013）されず，場所特有の遊び方以外にも多様な楽しみ方が可能である点が挙げられていた。ままごとコーナーの場合は，ごっこという遊びに特化した設備が充実していることで，その遊びをより深めたり継続したりすることが可能になる点が指摘されていた。このことから，保育者は，さまざまな遊びの楽しさを味わえる場所や，特定の遊びを自在に展開していける場所を，園内でこどもに人気のある場所とみなすと推察された。

2．保育者の考える，こどもによる環境づくりと保育者自身による環境づくり

保育者の考えるこどもによる環境づくりについての記述を KJ 法を参照し分類・整理したところ，特に「遊びのための環境づくり」にはこども自身が使用する物や遊ぶ相手，場所を選んだり，調整したりすることも含まれていた。このことから，保育者はこどもが遊びの構成要素となる対象に取りうる行為を幅広く「遊びのための環境づくり」と捉えているといえる。加えて，そういったこどもの環境づくりを，保育者は，こどもの占有物を園全体の共有物に戻していく「片付け」過程（平野・小林 , 2015）の中で気づき，こどもがつくった環境の意味について考え，自らの環境づくりにも活かしていた。

保育者自身が日々の保育の中で行っている環境づくりには，こどもが使用できる「材料」を準備し，特定の「コーナー」を設け，栽培や運動をテーマとした「設定保育」を実施することも含まれていた。この背後には,「季節」などの「配慮」すべき「視点」をふまえた保育者側の「意図」があり，また，その時・その場でこどもが示す「意思や欲求」の影響も示されている。そして，保育者による環境づくりの結果は，「現状のこどもの姿」につながり，さらには，次回以降の「保育者による環境づくりの意図」に示唆を与えるという循環が見いだされた。

文献

Bloch, H., & Morange, F. (2001). 外界の空間での身振りの体制化：定位とリーチング . 竹内謙彰・旦直子 (監訳), 空間認知ハンドブック (pp.25-48). 大阪：二瓶社 . (Foreman, N., & Gillet, R.(Eds.). (1997). Handbook of Spatial Research Paradigms And Methodologies. London: Psychology Press)

平野麻衣子・小林紀子 . (2015). 園の片付けにおける物とのかかわり : 占有物・共有物に着目して . 保育学研究 , 53(1), 43-54.

石倉卓子 . (2012). 幼児の育ちに必要な園庭環境の検討 : 表現行為を可能にする自然材と道具の関係性 . 保育学研究 , 50(3), 18-28.

金子嘉秀・境愛一郎・七木田敦 . (2013). 幼児の固定遊具遊びにおけるルールの形成と変容に関する研究 . 保育学研究 , 51(2), 28-38.

北村世都 . (2007). 3-1 行動観察と体験の内省 . 石原 治 . (編). 心理学基礎実験と質問紙法 (pp.56-61). 東京 : 培風館 .

北浦かほる . (1999). プライバシー . 日本建築学会 (編), 建築人間工学事典 (pp.67-68). 東京 : 彰国社 .

仙田　満 . (1995). 8 章 あそぶ : 遊びの行動と空間 . 空間認知の発達研究会 (編)，空間に生きる : 空間認知の発達研究 (pp.152-171). 東京 : 北大路書房 .

汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志村洋子 . (2012). 乳児保育室の空間構成と " 子どもの行為及び保育者の意識 " の変容 . 保育学研究 , 50(3), 64-74.

植原　清 (編著). (2012). 2013 年度版役立つ保育・教育用語集 . 大阪 : 大阪教育出版 .

山田恵美 . (2011). 保育における空間設定と活動の発展的相互対応 : アクションリサーチによる絵本コーナーの検討 . 保育学研究 , 49(3), 20-28.

謝辞

本研究における調査の実施および結果の集計，分析にあたり，ご協力くださった先生方に心よりお礼申し上げます。

本研究は平成 24-25 年度科学研究費助成（若手研究（B），課題番号 24700794）を受けた。

本研究の一部は，日本保育学会第 66 回大会にてポスター発表を行った。